



An Ecological Study of the RYOTENBIN Household
in Otohama, Chiba

卯田宗平

はじめに

①千葉県安房郡白浜町乙浜の概要

②「ハマ」での生業活動

③「オカ」での生業活動

④「両テンビン」世帯の生業構図

まとめ

【本文要旨】

本稿は、房総半島一海付き村を対象に、年間を通じて「ハマシゴト（漁）」と「オカシゴト（農）」を組み合わせる「両テンビン」世帯に焦点をあて、「両テンビン」の生業構図を明らかにし、生業を複合とする意味を問うものである。

「両テンビン」世帯は、夏季に「ハマ」で魚貝類を対象とする磯漁を中心とし、冬季には「オカ」で温暖な気候を利用した花卉栽培に従事している。とりわけ夏季の「ハマシゴト」において、「両テンビン」世帯の海女たちは、自らが経験したその日の海況に関する情報を夫である刺し網漁師に提供する。刺し網漁では、気象や海洋などの漁場環境に敏感に影響を受けるイセエビを狙うゆえ、投網前の「潮流」や「風波」に関する情報がより重要となるからである。乙浜において、年間を通じて漁撈活動を行なう「ハマイッポウ」世帯は、予備の刺し網数や船外機の排気量を増やすなど、個々の装備を充実させることで漁撈活動に対応している。一方、夏季にしか漁を行なわない「両テンビン」世帯は、海況に関する最新の情報交換によって対応している。

対象地域では、全158世帯のなかで「ハマイッポウ（漁業専業）」や「オカイッポウ（農業専業）」と呼ばれる世帯数の方が多い。このなかで「両テンビン」世帯は、わずか7世帯を数えるにすぎない。「ハマイッポウ」や「オカイッポウ」世帯が多いことからも分かるように、必ずしも複合的な生業を行なわなければ生計が維持できないというわけではない。このなかで生業を「両テンビン」とすることは、いわば「不十分な生産力を補う相互補完的な戦略」ではなく、「潜在的な生産力を最大限に引き出す戦略」という意味合いが強い。